

平松守彦

いっしん
一身にして

にしょう
二生

新潮社

平松守彦

いっしん
一身に就て

にしょう
二生



新潮社

いっしん
一身にして二生 にしよう

平成五年六月二十日 発行

著 者 平 松 守 彦
ひらまつ まもる もりひこ

発行者 佐 藤 亮 一
さとう りょういち

発行所 株式会社 新潮社

住 所 〒一六・一 東京都新宿区矢来町七一
振替 東京四八〇八 電話 営業部(三三六)五二一
編集部(三三六)五四一

印刷所 錦明印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

目

次

I 一身にして二生——わたしの履歴書 7

中央官庁から大分県庁へ 明治男の父 旧制大分中学 バンカラ五
高 同部屋の寮友 東大受験に失敗 海軍生活 愚兄賢弟 義
父・上田保 商工省入省 無から有を 世界一周 課長昇進
和製メジャー 輸出保険 対米特許交渉 情報処理振興 別離
電算機自由化 八人委員会 国土庁出向 故郷の温かさ 知事選
出馬 一村一品 「仏の里」とテクノポリス 大分フェア 車い
す馬拉ソン 文化の香り、歴史の顔 地域連合 若者たち

II ローカルにしてグローバル 105

1 一村一品運動事始め 107
2 それは上海から始まった 116

III

〔対談〕大分からの文化発信

.....

189

3 ヨーロッパとの交流——我々はバリの周辺装置ではない 130

4 テキサス魂——キャン・ドウ・スピリッツ 150

5 ロシア共和国——「日出る国」との交流宣言 157

6 アジアの星たち——ルック・イースト ルック・オーイタ 172

野上彌生子＋平松守彦 歴史から文化を学ぶ 191

高山辰雄＋平松守彦 大分・春日浦の絵かきであれば良い 215

丸山眞男＋平松守彦 きしみあいから独創が生まれる 228

あとがき 243

装幀・題字 高山辰雄

一身にして二生

一身にして二生を経るが如く一人にして両身あるが如し——福沢諭吉

I

一身にして二生——わたしの履歴書

——中央官庁から大分県庁へ

羽田空港出発ロビーは、むせかえる暑さだった。

昭和五十年七月二十七日。通産省の先輩や同輩、後輩、友人、親戚など数十人に囲まれ、別れの挨拶を交わす。

大分に戻るのは三十四年ぶりのことだ。

昭和二十四年から二十六年間におよぶ役人生活にピリオドを打ち、生まれ故郷大分県の副知事として第二の人生を送るスタートの日である。

全く思いもよらぬ帰郷であった。

昭和四十九年、田中角栄総理の主唱する「列島改造論」の推進役として国土庁が新設され、私も通産省から審議官として出向した。

その年の十月。突然、立木勝大分県知事が私を訪ねて来られ、「自治省から迎えた副知事が本省に戻り、副知事空席のまま来年二期目の選挙を戦うのは具合が悪い。ついてはあなたに副知事をお願いしたい」

といわれる。全く寝耳に水の話だった。

私はこれまで通産省という役所で経済政策を担当してきた。大分県との縁も、義父・上田保（大分市長四期。当時引退）の関係で大分・鶴崎臨海工業地帯造成など、浅からぬものもあったが、地方行政、地方政治はズブの素人、知識も経験ありません、とお断り申し上げた。

ところが翌年五月。再選を無事果たして上京された立木知事が宿泊先のホテルに私を呼び、「第二期県政に副知事としては是非、力を貸してほしい」と再度の要請である。

その頃になると、地元にいる大分中学以来の友人・吉村益次大分商工会議所会頭はじめ皆さんから、是非大分に戻り、地域発展のため頑張って欲しいという声が頻々と私の耳にとどいていた。東京にいる先輩や友人に相談すると「これまで東京にいて、何で今になって大分に戻るのか。やめた方がいい」という忠告も多かった。

このまま役人生活を送って局長などになったとしても、いずれは退職して団体や民間会社にも男冥利につきる。あるさにと骨を埋める覚悟で頑張るのも人生だ。

こんな気持ちいだんだん強くなり、同郷の大慈弥嘉久・元通産省事務次官にも相談にのつてもらい、立木知事の要請に「有難くお受けいたします」と答えた。

当時、私は五十一歳。五年前に妻を失くし、世田谷のマンションで出版社勤務の長女・世紀子と絵画を勉強中の二女・眞規子と三人のヤモメ暮らしをしていた。娘二人を東京に残しての帰郷は孤独で後ろ髪を引かれる思いがあった。

午後一時五分。迎えに上京した秘書大嶋稔君と共に大分行き直行便の機上の人となる。次第に遠ざかる東京の景色を眺めながら思わず、

へサイは投げられた

もう出かけるわ

わたしはわたしの 道を行く……

私の愛唱歌で、友人の阿久悠さん作詞「ジョニーへの伝言」を口ずさんでいた。

東京時代、椎名武雄氏（日本IBM社長）、野田一夫氏（多摩大学学長）など悪童連と「阿久悠の歌を歌う会」を結成、夜遅くまでカラオケを怒鳴ったことなどが走馬燈のように脳裡を駆けめぐった。

中央官庁から県庁へ。東京生活から地方生活へ。まさに「一身にして二生を経るが如き」（福沢諭吉）転身である。

翌二十八日県議会に出席、副知事としての就任挨拶をし、私の二生目の人生が始まった。

——明治男の父

大分をなぜ「おおいた」と読むか。今日まで定説がない。

「分」は昔「きだ」と読み、きざ（刻）むの意。古来地形が複雑で田圃が広く細分化されていたので「大分」（おおきだ）となったというのがもっともらしい説だ。〔注〕

その大分市に私は、大正十三（一九二四）年三月十二日に生まれた。生家は、大道町二丁目。

中心部より離れた南部で、ちょっと歩くと一面に田圃があり、麦刈の頃は麦稈を焼く煙が方々の田圃から立ち上るのが見えた。田の側を流れる小川で友人と一緒にドジョウ取りをした。

裏に刑務所があり、離れにあった二階からは服役者が青衣を着て作業する姿が見えた。

家業は帽子製造卸商。父・折次と母・クンの間に長女・妙子を筆頭に三男三女。私は二男。姉三人、兄・弟の八人家族で、それに帽子づくりの職人五、六人、子守さんやお手伝いさんを入れると十五、六人の大世帯だった。

普通の家のような玄関はなく、通りに平行して二十メートルほどの長い間口で、私たち家族が出入りする場所と、店で商いをするところが同じ。夜になると店に並んでいる帽子類を片付け、職人と将棋をさしたし、夏ともなれば通りに長椅子を出し、近所の子供達と線香花火を楽しんだ。父の折次は平松茂太郎の長男として明治十三（一八八〇）年六月に生まれた。別府市石垣の農家の出である。子供の頃から勉強好きで、「城下カレイ」で有名な日出町の小学校に徒歩通学した。石垣から日出まで約九キロの距離だから、子供の足で二時間少々かかる。毎日の通学で、わらじのカカトのところがすり切れるので裏にブリキをつけて通ったという。

大分師範時代も元氣者で、真夜中に寮生全員をタタキおこし、サルで有名な高崎山に駆け登ったという逸話も残している。その後、広島高等師範を卒業し、名古屋の愛知県第二師範学校の教頭となったが、教え子に市川房枝女史がいたことが自慢であった。

その頃、妻の父から大分の家業を継いでほしいと頼まれた。子供も多いし、教員生活では限界がある。思い悩んだあげく大分に戻り、畑違いの商店経営主となった。父もまた、一身にして二

生を経た一人だった。

父は帽子商を営みながらも教育者の夢を捨てきれなかったであろう。私の生まれた年に、昼間働く青年に勉強の機会を与えようと、私財を投じて、市内に夜間中学を創立した。

今日の定時制高校のはしりである。

「私ハ最モ真面目ニ、又最モ熱心ニ私ノ職業ヲ働キマス。ソシテ夜ノ全力ヲ此ノ人物養成ニ注ギマス。コレデ私ガ世ノ中カラ受ケタ御恩ノ一部ニ報イ以テ私ノ生涯ニ人生ノ真義ヲ刻ミ込ミタイト存ジマス」

父が斎戒沐浴して書いた設立趣旨書の一部である。

この学校は、昭和二十年、戦災で校舎が焼失するまで二十一年間続き、卒業生は千八百三十五人に上る。

現在は、短大・高校・幼稚園をもつ平松学園となり、兄嫁の恵美子が経営している。

「入学時に百人以上いた生徒も、卒業時は数十人になる。三年間継続することは容易ではない。卒業生は社会に出ても必ず有為な人材となる」

父はこうに語っていた。

この学校の校訓は「継続は力」。私が知事となってから作った「豊^{とよ}の国（大分県の古称）づくり塾」の塾是も父の精神を受け継いで「継続は力」とした。

父は八十七歳の天寿を全うしたが、今日「継続会」の名称で同窓会が開かれ、私も父の名代として出席している。

父は帽子商経営、私学校長、そして昭和四年の金融恐慌のさなかに設立された大分商工会議所

初代副会頭でもあった。市議会議員も四期務め、私が中学五年の時、副議長として活躍した。

しかし、なぜか私たち兄弟は父と親しく話した記憶はない。父は家では厳格な明治男で、私たちが父と話す時は、自然に「そうデス」「違いマス」というふうに、学校の先生に對してと同じような言葉遣いになるほど威厳があった。学校の成績表を見せても一切無言で、ほめられたことは一度もない。

だが、子は親の働く後ろ姿を見て育つたように思う。三人の息子はその後、兄の克巳が日本興業銀行、弟の義郎は名古屋大学教授、私が知事と、実業、教育、政治と父の辿った三つの道をそれぞれ三人が受け継いだ格好となった。

【注】大分は「おおきた」の転訛という説もある。『古事記』や『豊後風土記』に景行天皇が九州巡幸の途中、大分を訪れ、広い田圃を眺めて「形広く大きにして亦麗し。因りておおきだ（碩田）と名付くべし」といったという記述がある。私の母校大分中学校の交友会誌の名は「碩田交友会誌」である。しかし碩田を大分に結びつけるのは無理であるように思う。

——旧制大分中学

キリシタン大名大友宗麟（二五三〇—一五八七年）時代、南蛮船が出入りした大分市内の春日浦に、宗麟の銅像と記念碑が建っている。その除幕を昭和十一年、母の祖父である二宮吉重（当時九十七歳）が行い、曾孫の私たちも参加した。